様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２３８９

研究課題名（和文）フランス近現代における社会の変容とネオ・ジャクソニスム的発想の変遷

研究課題名（英文）Transformation of Society and Evolution of the Neo-Jacksonist Tradition in Modern France

研究代表者
田母神　顯二郎（TAMOGAMI, KENJIRO）

明治大学・文学部・専任教授

研究者番号：３０３１８６６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：「こころの時代」と呼ばれ様々な心理療法が乱立する現代にあって、「トラウマ」や「解離性障害」の先駆的研究者として近年国際的な注目を集めているのがピエール・ジャネである。彼は心理療法家としても優れた手腕を発揮し、理論と治療の両方でフロイトに劣らぬ実績を残したが、不当にも長い間忘却されていた。本研究の最大の成果は、ジャネの多年にわたる膨大な業績を掘り起こすと共に、その「ネオ・ジャクソニスム的発想」に注目することで、彼の理論の全体像と時代ごとの変遷を統一的に示すことに成功したことにある。また、彼の心理療法論の先駆性と現代的可能性を確認できたことも、本研究の重要な成果と考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、これまで断片的な情報でしから知られていなかった精神科医ピエール・ジャネの理論を、その「ネオ・ジャクソニスム的発想」に注目することで、統一的に示すことに成功したという点で大きな学術的意義を有すると考える。また本研究は、ジャネの理論と心理療法的実践が、「解離」や「トラウマ」に関するものだけでなく、今日のほとんどの心理療法の源流といえるものであることを明らかにした点で、大きな社会的意義を有する。現代の精神医学や臨床心理学が、ジャネから学ぶことは極めて多いと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to investigate and reconstruct the theory of Pierre Janet, pioneering French psychiatrist, psychologist and psychotherapist. Today his theory has been receiving increasing attention, but because Janet has fallen into oblivion for a long while, many essential pieces of his theory have been unknown. Thus we attempted to interpret his enormous works from the perspective of “neo-jacksonism” and succeeded in showing it’s overall picture as well as its consistency. We succeeded also to confirm that his psychotherapeutic theory is the foundation of almost all contemporary mental healings and that, therefore, il has significant potential to create new methodes of treatment.

研究分野：フランス文学

キーワード：ピエール・ジャネ　ネオ・ジャクソニスム　心理療法　臨床心理学　精神医学　トラウマ　解離性障害　精神分析

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．　研究開始当初の背景

（１）　現代が「こころの時代」と呼ばれるようになって久しいが、そうした中で、「トラウマ」や「解離性障害」の先駆的研究者として近年国際的な注目を集めているのが、ピエール・ジャネ（1859～1947）である。しかし、ジャネはフロイト（1856~1939）が創始した精神分析運動と対立したがゆえに、その死後彼の業績の殆どは忘却の淵に沈められ、1970 年代にアンリ・エレンベルガーの尽力によって「ジャネ・ルネッサンッス」が興るまで、まったく世に知られない存在となっていた。しかし、現在の精神医学や臨床心理学そして精神療法の見地からすれば、今日のスタンダードとなっている種々の理論や技法を先取りしていたのは、むしろピエール・ジャネの方であることがに明らかになってきている。それゆえ、ジャネの理論や精神療法上の技法を知ることは極めて重要な研究的意義をもっているのだが、残念なことに、彼の長年にわたる膨大な研究の全体像を把握しえているものは世界中を見渡しても極めて僅かしかいない。ジャネには、予想以上に深遠で通常の思考法を根本から問い直さなくてはならないような、過激な認識論とそれに基づく心理学があるからである。このため、多くの学者・研究者は、ジャネ理論の重要性と可能性を感じ取りながらも、その詳細については奥歯にものがはさまったような言い方しかできないのが現状であった。

（２）　これに対し、研究代表者は、平成 20 年度から始められた科研費研究において、フランス精神医学、とりわけジャネの理論に見られるネオ・ジャクソニスム的発想に注目することにより、ジャネにまつわる数多くの誤解を正し、ジャネ理論の統一的な全体像と各時代における変遷を明確に掴めるようになってきた。

（３）　しかし、この作業を完遂するためには、ジャネが置かれていた社会状況や歴史的状況を正しく把握する必要があった。ネオ・ジャクソニスム的発想に貫かれたジャネの理論の発展は、急激な社会の解体と再創造が進行していった 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのフランス社会の変化と切り離すことができなかったからである。

（４）　一方、研究代表者は平成 20 年度から平成 26 年度にかけての科研費研究において、ジャネ読解の鍵となった「ネオ・ジャクソニスム」の普遍性を探るため、領域横断的な調査と分析を行ってきた。この結果、ジョン・ヒューリングス・ジャクソン、テオデュール・リボー、アンリ・エー、ジャン・ドレーなどジャネ以外の精神科医・精神病理学者の理論、ボードレール、プルースト、ミショー、ベケットなどの文学作品、メーヌ・ド・ビラン、ベルクソン、アランなどの哲学的著作における「ジャクソニスム」または「ネオ・ジャクソニスム」的発想が存在することを確認した。これにより、フランスの文学・思想・精神医学など多領域にわたって「隠れた知的基盤（エピステーメー）」としてのネオ・ジャクソニスムの系譜が存在することが明らかになり、こうした「知の系統図」のうえにジャネを位置づけることができるようにもなってきた。

２．　研究の目的

研究代表者は、このように平成 20 年度から行ってきた「ネオ・ジャクソニスム」および「ピエール・ジャネ」を中心とした研究を踏まえ、新たに歴史社会学的視点を導入することにより、より立体的な「ネオ・ジャクソニスムの系譜図」と「ピエール・ジャネ像」を作成することを目指してきた。また当時の社会と時代の背景が、今日のそれと多くの点で重なることを確認することにより、ジャネ理論とネオ・ジャクソニスムがもつ現代的意義をさらに明らかにしようと努めてきた。

３．　研究の方法

こうした目的を達成するため、研究代表者は（1）デヴィッド・ハーヴェイの著作を中心に、社会学、文化史、都市史、建築史、芸術史などの分野に関する資料に当たる一方、パリを中心に幾つかの都市でフィールドワークを行ってきた。その際、各地に置かれた精神医療施設の歴史や変遷に注目することにより、いっそう時代と社会の暗黒の部分が浮き上がってくるように試みた。（2）また、平成 20 年度から行ってきたフランスにおける「ネオ・ジャクソニスムの系譜図」作成の作業も進め、ジャネの理論をいっそう正確にフランスの「知の歴史」に位置づけられるようにした。またその際、ドイツ語圏や英語圏の精神医学や精神分析の理論も検討することにより、「ネオ・ジャクソニスム」的発想がフランスに特有のものであるかを検証することにした。（3）ジャネの生涯の盟友であると同時に思想的には対極に位置づけられている哲学者ベルクソンの著作とジャネのそれを読み比べることにより、ジャネ理論についてのより踏み込んだ解釈が得られるよう試みた。（4）精神医学や精神分析、発達心理学、臨床心理学、精神療法などの膨大な著作を渉猟することで、ジャネの理論と精神療法がもつ先駆性と現代的可能性を明確化しようと試みた。

４．　研究成果

（１）　上記（1）の歴史社会学的視点を導入した研究により、19 世紀末後半から 20 世紀前半が今日に比べても劣らぬほど、あるいはそれ以上に激しい社会の解体と再編集にさらされた時代であること、そして二つの世界大戦へと不可避的に向かっていく世界の流れにおいて、多くの人が不安や無力感に苛まれていた状況にあったことを突き止めた。また、そうした状況を背景に、多くの精神療法家が登場し、「第一次セラピー・ブーム」あるいは、元祖「こころの時代」とも呼べるほどの活況を呈していたことが明らかになった。その中で、次第に中心的な運動となっていったのがフロイト率いる精神分析運動なのである。いずれにせよ、ジャネの「創造と解体」を軸とするネオ・ジャクソニスム的理論とそれに基づいた精神療法、およびフロイトによる精神分析運動の発展は、こうした歴史的・社会的文脈に置き直すことで、よりいっそう精確に理解されることが分かった。

（２）　（2）の「ネオ・ジャクソニスムの系譜図」作成とそこにジャネを位置づける作業については、まずメルロ＝ポンティ、サルトル、ドゥルーズなどの哲学理論にもかなり変形した形ではあるにせよ「（ネオ・）ジャクソニスム的発想」が見られることを確認し、さらに、言語学者ローマン・ヤコブソンや考古学者アンドレ・ルロア＝グーラン、美術史家ディディエ＝ユベルマン、そして発達心理学および発生的認識論学者としてのジャン・ピアジェらにも形を変えた「（ネオ・）ジャクソニスム的発想」が見られることを確認した。とりわけ、最後に挙げたジャン・ピアジェはジャネから深い影響を受けていることが「発見」されたことにより、ピアジェの理論から翻ってジャネ理論を解釈する道が開かれたことは、本研究の重要な成果として挙げることができる。その一方、フロイト、ユング、アドラー、ヤスパース、クレペリン、ブロイラー、ヴィンスワンガー、クレッチマー、フランクルなどのドイツ語圏の精神分析・精神医学理論を読破することで、「「ネオ・ジャクソニスム的伝統」がフランスに固有のものであること、またそのことがジャネ理論の需要においても多くの誤解の元であること、ひいてはフロイトとジャネの論争もここに主要な遠因があること、などを確認することができた。

（３）　ベルクソンの著作とジャネの著作を詳細に読み比べることにより、直観主義者ベルクソンと「ウルトラ構成主義者」ジャネの対立をつかむことができただけでなく、ベルクソンの記憶理論や宗教理論にジャネ理論が強い影響を与えていることも確認できた。またこのことと関連し、ジャネ理論がもつ認識論的側面を明らかにすることができ、ジャン・ピアジェやガストン・バシュラールに与えた影響も示すことができるようになった。

（４）　ジャネを、精神医学関係では主としてシャルコー、クレペリン、ブロイラー、ミンコウスキー、ヴィンスワンガー、クレッチマー、フランクル、アンリ・エー、中井久夫、木村敏、心理療法関係では、主としてフロイト、ユング、アドラー、カール・ロジャース、ハンス・アイゼンク、アーロン・ベック、ミルトン・エリクソン、など多数の著者と比べることにより、ジャネ理論がもつ精神療法論としての先駆性と現代的可能性を明らかにすることができるようになった。より具体的にいえば、彼の理論と実践には、催眠療法・認知行動療法・家族療法・ナラティヴアプローチ・薬物療法といった、今日の主要な心理療法が、「原型」的にではあれ、すべて含まれていることがわかった。しかも「患者が抱えている病や症状はひとりひとり違う」という信念をもつ彼の治療においては、今日の「アセスメント」にあたる予備段階の診察に重点がおかれ、臨機応変に複数の治療法を組み合わせていくという前述の「統合的視点」が明確に示されている。さらにジャネは、ロジャースによる「クライエント中心主義」を思わせるような謙虚さで、患者の話を（その非言語的表現もふくめて）じっくり聴き、観察することから診療を始め、医師と患者の「ラポール（信頼関係）」の確立を通して、「レジリエンス（復元力）」が高まっていくことまでを見通している。初期のヒステリー研究の時代から「科学性」を重んじ、「エビデンス・ベイスト」的アプローチを最初に確立しようとしたのもジャネであるなら、精神障害における「環境」や「家族」といった要因の重要性を力説したのもジャネなのである。

（５）　以上の研究と成果を踏まえ、平成２９年度から、ジャネ理論についての単著を執筆中であり、平成３１年度の完成を目指している。そこでは、ジャネ理論の全体像と各時代における変遷、その先駆性と現代的可能性についての考察が盛り込まれている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

（１）　<u>田母神顯二郎</u>「ベルクソンとジャネ：創造性をめぐる二つの思考」（『文芸研究』、査

読有り、127 号、25-51 頁、2015）
（２） 田母神顯二郎「笑いと物質 ： ベルクソンとジャネ（2）」（『文芸研究』、査読有り、128 号、1-26 頁、2016）
（３） 田母神顯二郎「ベルクソンとジャネ(3)　連続と非連続」（『文芸研究』、査読有り、132 号、117-145 頁、2017）
（４） 田母神顯二郎「ベルクソンとジャネ(4) 「あわい」の思想と二元論」（『文芸研究』、査読有り、133 号、17-45 頁、2017）
（５） 田母神顯二郎「ベルクソンとジャネ(5) <物語>とその彼方」（『文芸研究』、査読有り、134 号、1-31 頁、2018）

〔学会発表〕（計１件）
（１） 田母神顯二郎「アンリ・ミショーと「ベルギー性」」（＜日白修好 150 周年記念シンポジウム:文化・知の多層性と越境性＞、東京理科大学、富士見校舎、2016 年 12 月)

〔図書〕（計１件）
（1）田母神顯二郎「ドゥルーズとミショー」（岩本和子、三田順編著『ベルギーを<視る>：テクストー視覚ー聴覚』、松籟社、2016）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。